

③ 人を大切に作る町をめざして — 門脇 政夫 —

「やったあ。敬老の日があるから、明日から3連休や。八千代のおじいちゃんとおばあちゃんの所へとまりに行こう、お母さん。」

神戸の小学校に通うころさんは、9月のカレンダーを見て、うれしそうに言いました。

「そうしょうか。敬老の日はね、八千代ではじまったのよ。」

そう言うと、お母さんは、敬老の日をつくるために努力した、門脇政夫さんという人の話をしてくれました。

門脇政夫さんは、明治44年(1911)、加西郡多加野村(今の加西市)で生まれました。そして、7才のとき、お父さんの弟、おじさんの家の子どもとして、野間谷村にやってきたのです。これまでなれ親しんだ家をはなれることになりましたが、おじさんとおばさんは、お父さんお母さんとして、あたたかく政夫さんをむかえてくれました。政夫さんは心やさしい少年に育ち、勉強にもはげめました。

あるとき、政夫さんは「脊椎カリエス」という重い病気にかかってしまいます。家族とはなれ、ひとりぼっちで病院ですごすうちに、政夫さんの気持ちはどんどんずんでいきました。そんなある日、お父さんが、病室に手品師(手品をえんじる人)を連れてきてくれたのです。楽しい手品を見ているうちに、政夫さんの気持ちはすっかり明るくなりました。政夫さんは、自分を大切にしてくれるお父さんとお母さんのやさしさを感じ、「ぼくも、まわりの人を大切にしよう」と思ったそうです。

昭和22年(1947)、政夫さんは、「人を大切に作る」ことを信念(正しいと信じる気持ち)として、野間谷村の村長になりました。35才の若い村長さんです。そのころ、日本はやっと長い戦争が終わったばかりで、くらしはまずしく、人々の心もあれはてていました。とりわけ、政夫さんが心をいためたのは、お年よりたちを大切にしようという気持ちがうすれてしまっていることでした。

そのとき、政夫さんは、美濃国(今の岐阜県)の養老の滝にまつわる伝説(いいたえ)を思い出しました。むかし、まずしい家のむすこが、年とった父親のために、山の中の滝の水をくんで帰ると、おいしいお酒にかわっていて、そ



のお酒をのんだ父親はたいそう喜び、元気になったというおはなしです。「お年よりたちに喜んでもらえることをしたい」と考えた政夫さんは、村で敬老会（お年よりをうやまい、苦勞や働きをねぎらい、感謝する会）を開くことにしました。

「農閑期（農業の仕事の少ない時期）で、気候もよい9月15日はどうだろう。」

第一回の敬老会は、政夫さんが村長になった年の9月15日、55才以上のお年よりをまねいて、八千代小学校（当時は野間谷第一小学校）の講堂で開かれました。敬老会では、八千代の人たちによってお芝居がえんじられました。政夫さんも役者として登場し、お年よりたちは大喜びしました。政夫さんは、こうあいさつしました。



「みなさんの長寿（長生きすること）をおいのりします。どうぞ、いつまでもお元気でお願いします。そして、若い村長に、みなさんの知恵をかしてください。」

そして、次の年、9月15日を「としよりの日」として村の祝日にします。この取り組みは、多可郡だけでなく、兵庫県全体に広がっていきました。昭和25年、兵庫県が9月15日を「としよりの日」として祝日にしたのです。

政夫さんは、「9月15日を日本の国の祝日にしたい。」と考えました。昭和23年にできた「国民の祝日に関する法律」で、「成人の日」や「こどもの日」が国の祝日となっていたからです。9月15日をお年よりのための祝日にするよう、政夫さんや政夫さんの考えに賛同する人たちは、何度も何度も国にはたらきかけました。

そして、とうとう昭和41年、9月15日は「敬老の日」として国民の祝日となりました（今は9月の第3月曜日）。「もっと人を大切にする社会をつかっていかなければ。」という政夫さんの思いと努力が、やっと実をむすんだのです。

「八千代コミュニティプラザに、『敬老の日』提唱の地の石碑があるのよ。多可町には、『おじいちゃんおばあちゃんこども絵画展』もあるし。」

おかあさんがそう言うと、こころさんはうなずきました。

「その石碑、見に行く。それで、来年は、おじいちゃんとおばあちゃんの似顔絵をかく。」

門脇政夫さんの「お年よりを大切にする」気持ちは、これからも受けつがれていくことでしょう。

